

書教育

自身の授業教材は自分で作る 報告者：苫小牧西高校分会 磯角 広一

1 今年度の分科会について

昨年度、長年に渡ってこの分科会を支えて来た教員の参加がなくなり、この分科会の存続が非常に危うくなっている。参加者数も参加レポート数も少なくなってしまったため、昨年度より分科会を2日目だけの実施とした。2日目だけの開催は、他の分科会に参加できるメリットもあり、筆者も他の分科会に参加して楽しく学ぶことができたが、参加者数の減少はいかんともしがたい状態である。

今年度の参加者は3名で、いずれも高校書道担当教員であった。うちレポート発表は2名である。しかし、残る1名は合同教研未参加の書道教員であったのは喜ばしいことである。残念ながら、今年度も小中学校の教員の参加はなかったのは例年通り。

生徒の減少により学校数も減り、それに伴って高校書道担当の教員数も減少している。また、小中学校で書写指導については実施しているものの、その指導方法についての研修時間も機会もほとんどないのが現状だろう。多忙化のため時間を作ることも困難になっているのは容易に想像出来ることである。「書を通して人間をまるごと育てる」を標榜しているこの分科会が、日本の教育界を象徴しているようで悲しくもある。

2 「8年目のもやもや」苫小牧西高校 磯角 広一

筆者は、主に授業計画の見直しについての報告を行った。苫小牧西高校では、3年間を通して音楽と書道の選択必修の芸術授業を実施している。生徒の興味・関心を引き出すための教材選定と、生徒の成長・発達を促すための適切な実施時機を考え、見直しながら授業を進めているという内容の報告を行った。なぜその作業が必要なのかと言えば、過去の生徒には通用していた教材が、今の生徒の関心を惹かないことも増えていて、生徒の変化と教材の改善が必要になっているためである。

最近の生徒の関心を惹かない原因のひとつは、「楽しい」のとらえ方が変化していることによるものと感じている。現勤務校に赴任した当時の生徒にとって「楽しい」は「自由に考えて、生み出す楽しさ」を楽しむ生徒が多かったように感じていたが、現在は与えられる「楽しさ」に乗っかっているだけの印象を受ける。カヌーイスト野田知佑氏の言葉を借りれば「ディズニーランド的楽しさ」を求めているようである。そう考えると表現の主体である「自分」の発達が不十分なのかもしれない。その自分が何者であるか、これからどうしていけば良いのかなど、自分の成長を促す教材を用いて子どもが「楽しい苦しみ」を感じられる授業にしたいのだということを再認識した。



3 「日々の活動から 2018」 砂川高校 中谷 幸代

中谷氏の報告は、日々の授業での実践からのもので、臨書指導で気づいたことや筆の動

きを体の動きで説明するなど、生徒に寄り添った視点でものごとを捉えているのが印象的な報告であった。中谷氏が指摘するように、臨書において文字全体の形をイメージできず、個々の点画をクローズアップしてしまうことで手本とは大きく異なった形で臨書してしまう生徒や、横画の右肩上がり表現ができずに書き上がった形がへんてこりんになってしまう子どもが増えているように感じると報告している。

子どもたちの体の感覚が以前の生徒とは少しずつではあるが変化していて、ものの見方や手の動かし方に影響を与えているのではないかと考えられる。明確な数値や指標がないため単純に比較はできないし、比較したところで意味はないかもしれないが、子どもの学びの質が変わってきていることが今後の社会のあり方に影響を与えることは間違いのないことである。

また、創作へのアプローチとして毎年実施している教材「いろはうた」「早口言葉」についても報告があった。氏の授業が確かなものとして成立するために重要な教材であろう。授業の中で教員が目指すものと、生徒の活動が合致して生徒にとっても楽しく努力できる良い教材であると感じた。筆者が氏と同様の教材を用意して、同じような授業展開をしても、きっとそれなりの効果は得られるであろうが、氏と同様のものは引き出せないだろう。長く使える教材は、各自の工夫とそのスタイルから生み出されるものなのだとつくづく感じた。

この分科会報告には直接関わりはないが、中谷氏は初日に別分科会でレポート発表していて、そのレポートについてこの分科会でも説明してもらった。その内容説明については、参加分科会報告に任せるが、生徒会活動に関わる昨年度から今年度にかけての実践報告であり、書教育だけではなく中谷氏の人柄を感じさせる示唆に富んだレポートであった。



3 実践報告 根室高校 林 千鶴

林氏は今回初参加ということで、たいへんありがたいと感じている。レポート持参ではなかったが、授業とその評価に関わる悩みや困っていることなどを報告してくれた。授業そのものも大変だということであったが、その評価について保護者からクレームがあったことが何より辛かったそうである。

芸術書道は基本的に各校1人なので、直接書道授業に関して他の教員にアドバイスを求めることが難しい。実践についても直接書道授業に役立つことを学ぶのには難しい環境であるのは事実である。しかし、その少ない機会を大いに役立てて、その困難に立ち向かいながら奮闘し、子どもたちとともに実践した記録としてのレポートを来年度は期待したい。

4 まとめ

教育研究活動が衰えていることに危惧を持っている人はどのくらいいるのだろうか。こう書くと、私自身がどのくらい熱心に取り組んできたのだと批判されるかもしれない。しか

し、日々良い授業をしたいと考えている教員がいる反面、それを行動として活動している人は本当にどれくらいいるのであろうか。私が駆け出しの頃は、教育について話しているうちに、ついつい口論になってしまう教員もいたが、最近はそのようなことを見ることもほとんどなくなった。熱をこめて教育を語ることをしなくなった私自身の自戒を込めてこの報告のまとめを記しているが、本気で取り組まなければ、生徒の本気は生まれないんだと今年の合同教育研究全道集会は教えてくれた気がする。

教育を取り巻く環境が厳しくなるなか、この集会に参加している皆さんに敬意を込めて、来年もまたお会いしましょう。この集会に参加していない皆さんで、この報告を読んでくださっているありがたい方々にも敬意を込めてあなたの力が必要です。来年是非参加してください。